

肥前療養所の伊藤正雄 ——精神科病院全面開放の先駆者——

岡田 靖雄

青柿舎(精神科医療史資料室)

精神科病院の開放制は戦前において呉秀三、石田昇、加藤普佐次郎らにより部分的に実践されてきた。だがその本格的実践は、佐賀県神埼郡東脊振村(現吉野ヶ里町)の国立肥前療養所(現肥前精神医療センター)において、所長伊藤正雄(1913-1989)のもとで1956-1960年におこなわれたものである。伊藤をささえたのは、看護部長廣瀬喜美子(1918-2007)および医局長三重野正彦(1925-1975)であった。わたしは精神科医療史研究会で、伊藤(1986年)および廣瀬(1990年)からくわしい話しをうかがうことができた。

伊藤は1936年に九州帝国大学医学部を卒業すると、当時の満州の野砲隊づきとして勤務、1943年に帰国すると九州帝国大学精神科で、主として組織病理学の研究にとりこんでいた。伊藤が1956年7月に赴任した頃の肥前療養所は定床480。当時はまさに僻地であった。医師に欠員がおおく、病気休養の人もいて、実動医師は3名だけであった。一定時間だけ開放地区で作業に従事する患者は約50名であった。

伊藤はイギリスなどではじまっていた開放化の動きをしてもはいなかった。合州国留学中だった人を通じて、ある精神科病院にかかっていた“The most important person in this hospital is the patient.”という標語が、そのままかれの信念であった(この標語の金属板が療養所の玄関にとりつけられていた)。病棟改築を機に当然のこととして開放化がすすめられ、開放率は95%にまで達した。もちろん、抵抗はおおきく、とくに事務系、村人、そして家族の抵抗がつよかった。だが、話し合い、付近のパトロールなどによって、それらの抵抗は克服されていった。実動医師が3名だけだったことも幸いしていた。

開放とは、鍵をかけないという物理的なものだけではない。手紙検閲の廃止、面会の自由化、電気ショック療法から薬物療法への切り替え、何時間もかけての入院説得、看護者の男女混合勤務、一部病棟での男女混合収容、患者を対等の人間としてあつかうこと、なども同時にすすめられた。こういうなかで、患者たちは活性化し、退院者も続出した。

伊藤は、自分が特別のことをしているとはかえがえなかった。生活のため、また子供の教育のために1960年に肥前をさり、関東にうつった(友人に紹介されたのは、のちに宇都宮病院事件で名のあがった病院であるが、伊藤はその理事長の不誠実さを感じて、半年でそこをさった)。

開放制はそのままつづけられるだろうと伊藤は信じていた。だが、かれがさったあと間もなく開放制はつぶされた。一つには、患者退院のあと空床がなかなかうまらず、厚生省から看護者定員削減がいわれたためである。もう一つには、開放化がすすめられる時期のほとんどを病気休養中であった医務課長が復職し、開放化をころよくおもわなかったためである。九州大学精神科にも伊藤への理解はとぼしかった。熊本大学出身の三重野も、おわれるように肥前をさった。

1957年11月9日第1回病院精神医学懇話会(現病院・地域精神医学会)での伊藤の発表(わたしもそれをきくことができた)に刺激されて、精神科病院の開放化はすこしすすんだが、間もなく停滞した。そのち開放化の第2の波がおこったが、これも停滞している。任意入院した患者の多くが閉鎖病棟におかれている日本の現状は、なんとしても不可解である。世界に冠たる精神科病床数をほこり、そして開放化がすすまぬ日本の精神科病院の収容所性を伊藤正雄はなんとみることだろうか。

なお伊藤は、1954年の日本精神神経学会民主化運動の先頭にいた。